

冬鳥ウォッチ 2015 年冬 報告

気が付けば今年も早やゴールデンウィークも過ぎ、冬鳥たちは繁殖地で子育てに入っているところです。2015 年冬は、すでにバードリサーチニュースの速報でお伝えしたように、北日本ではアトリの大群の話題がインターネットや新聞等を賑わせました。さらに、アトリだけでなくシメやツグミなどの冬鳥も例年になく多かったように感じました。そのため、身近に多くの冬鳥が見られたことから、春になって冬鳥たちがいなくなると「アトリロス」や「冬鳥ロス」を感じた方たちも多かったのではないのでしょうか。2015 年冬は、話題になったアトリ以外の調査対象種はどうだったのでしょうか。ここでは、速報後に届いた記録も含めて改めてアトリの状況を報告するとともに、カシラダカやカワラヒワの記録状況や群れの地域的な出現状況などについて報告いたします。

調査および記録状況

2015 年冬の調査は、東北地方から本州、四国、九州の 1 都 2 府 26 県の 48 名の方によって 101 か所の調査地から情報が寄せられました。調査対象種 6 種の記録件数の合計は 182 件で、調査地数、情報件数とも 2012 年冬に次いで 2 番目の多さでした(図 1)。大まかな地方別の調査地数は、今年も関東・甲信地方が最も多く 60 件、次いで中国・四国・九州が 16 件でした。例年情報件数が少ない東北地方からは 15 件と 3 番目に多く寄せられました。ただ、新潟・北陸は 3 か所と少なく、北海道からの情報はありませんでした。これらの地域では、積雪も多く、気温も低いため、定期的な冬の調査は難しいのかもしれない。

記録種は、調査対象種の 6 種すべてが記録されました。しかし、イスカ(2 件)とハギマシコ(6 件)は、ほかの 4 種と比べると極めて少数でした。一方、カワラヒワは例年どおり最も多く、情報件数の 56%を占め、次いでアトリが 45.5%、カシラダカ 43.6%の順でした。マヒワはこれら 3 種より少なく 25.7%でした。ただ、情報件数は少なかったのですが、マヒワは東日本から西日本まで広く記録されました。

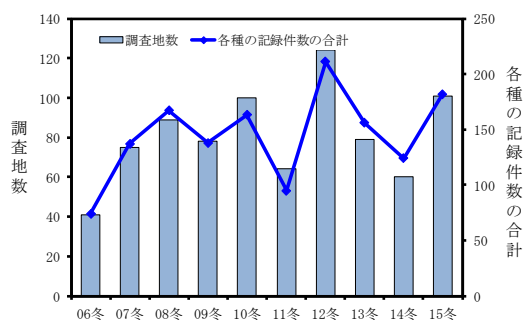


図 1. 冬鳥ウォッチの調査地数および情報件数の推移

2015 年冬の特徴

アトリ

2015 年冬の特筆すべき点の一つは、速報でも紹介したようにやはりアトリの多さです。図 2 のアトリの記録地点から 201 羽以上の大きな群れの出現地点は岩手県から栃木県、新潟県に集中していることがわかります。宮城県では 1 月上旬に 25 万羽もの大群が記録され、その後伊豆沼や蕪栗沼などでも数万の群れが記録されました。その後、福島県や新潟県、栃木県でも大きな群れが記録されました。特に、栃木県では 1 月中旬ごろから数百

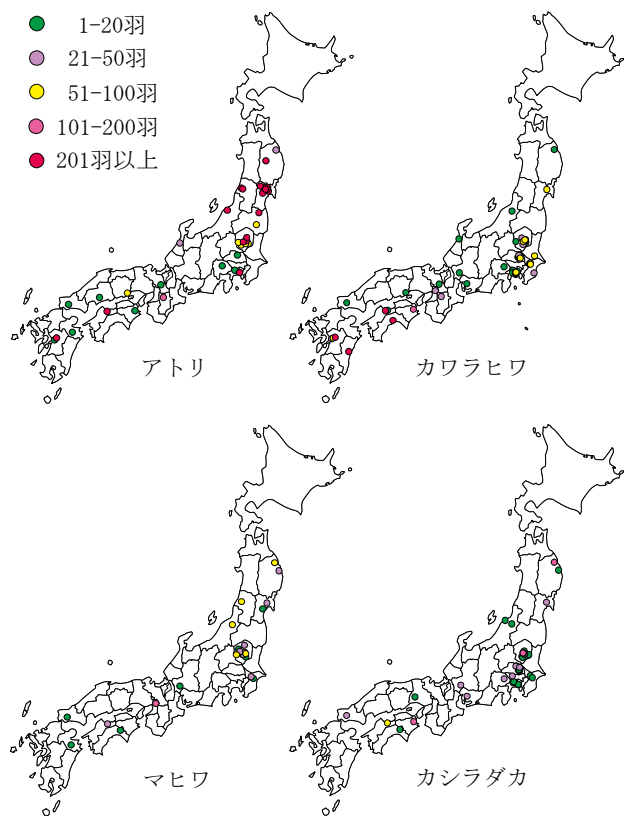


図 2. 2015 年冬の主要 4 種の記録地点



羽から数千羽の群れが記録されはじめ、都市公園や小規模な平地林でも50羽前後の群れが出現しました。さらに、2月になると約1か月近くにわたって栃木県の中央部に位置する鹿沼市で20万羽とも70万羽とも言われる大群が観察されました。この大群が記録された場所は、昨年9月の台風18号による豪雨によって河川が氾濫し刈取り前のイネが水没し、そのまま放置された場所でした。そのため、大量の食物が残されていたために、ひと月近くにわたって大群が留まったと考えられます。この大群は、2月下旬になって被災地の復旧工事がはじまると観察されなくなりました。ただ、周囲には分散して生息していたようです。

ところで、東北地方では、栃木県鹿沼市で大群が記録されていた2月中旬にも岩手県や宮城県、福島県で20,000羽や30,000羽の大群が記録されていました。これらの数から、2015年冬はおびただしい数のアトリが北日本を中心に飛来したことがわかりました。過去の冬鳥ウォッチでは、2010年1月から3月に岐阜県で70万羽もの大群が記録されています。と言うことは、毎年このようなたくさんのアトリが日本で越冬しているのでしょうか。それとも、これらの年だけ、繁殖地での繁殖成績がよく個体数が著しく増加して集団侵入が起きたのでしょうか。さらには、気象条件などで渡りのコースが変わり、日本へ飛来したのかもしれませんが。残念ながら、現時点でははっきりしたことはわかりません。冬鳥ウォッチを毎年同じフィールドで継続して行うことで、この辺を明らかにできるのではないかと考えています。なお、2015年冬



は東北地方や栃木県に比べると個体数が少ないものの、四国や九州でも201羽以上の大きな群れが記録されています。これらの地域では、2015年冬以外にもたびたび大きな群れが記録されています。これらの群れが東日本の群れとは別ルート(たとえば朝鮮半島経由)で飛来していないか気になります。とは言え、2015年冬は全国的にアトリの多い冬だったと言えます

カワラヒワとカシラダカ

2015年冬はカワラヒワとカシラダカの記録件数も多い年でした。ということは、2015年冬は14年冬より個体数が多かったのでしょうか。これら2種は、先に述べたアトリのように大群がほとんど記録されないため年による変動が分かり難く、冬鳥ウォッチではある意味「地味」な種です。一方で身近な環境に生息するため記録件数も多く、地域的や調査年の記録状況の違いを比較するのに適しています。そこで、これら2種の直近の2シーズンの個体数を比較しました。

冬鳥ウォッチでは個体数を6段階の概数と実際の個体数を記録します。ただ、大きな群れになると正確な個体数がカウントし難いためか、実際の個体数が記録されない場合があります。そこで、ここでは同じ調査地の両年の概数を比較しました。

カワラヒワは、関東から中国、四国地方の20か所の調査地の結果を比較しました(図3)。すると、2年とも同じ個体数ランクが20か所中14か所ありました。一方、2014年のほうがランクの高い調査地は4か所、逆に2015年の

方がランクの高い調査地は2か所でした。わずかに2014年の方が個体数ランクの高い調査地が多かったものの、両年で有意な違いは得られませんでした (Willcoxon 符号付順位和検定 $P=0.22$)。

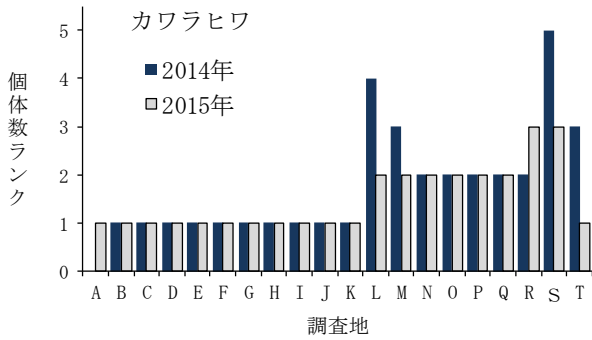


図3. 2014年冬と2015年冬の同じ調査地におけるカワラヒワの個体数ランクの比較

カシラダカは16か所のうち、2014年のほうが2015年よりランクが高い調査地が10か所、逆に2015年が高い調査地が1か所だけでした(図4)。この16か所の調査地では有意に2014年冬のほうが2015年より個体数が多いことがわかりました (Willcoxon 符号付順位和検定 $P=0.0098$)。したがって、少なくともカシラダカでは2014年冬のほうが個体数が多かったと言えます。そのため、この2種の情報件数の多さは、個体数の多さを表していないのかもしれませんが。ただし、両種とも調査地は関東地方が多くを占めています。そのため、この結果は関東地方での2年間の違いを表している可能性もあります。皆さんの調査地では如何でしたでしょうか。今後、各地

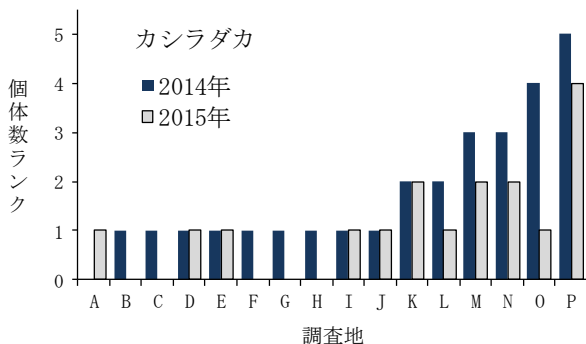


図4. 2014年冬と2015年冬の同じ調査地におけるカシラダカの個体数ランクの比較

で継続した調査地がさらに増えることで、地域的な変動も含め正確な比較ができるものと思われます。

カワラヒワは温暖な地域が好き？

図2のカワラヒワの個体数ランクの分布をみると、201羽以上の大きな群れは四国や九州で記録されています。2015年冬では、愛媛県で10,000羽以上の群れが記録されました。そこで、調査情報が増加した2007年以降の9年間の記録をもとに、カワラヒワの個体数ランクの地域的な傾向を比べてみました(図5)。その結果、201羽以上の大きな群れの割合は中国・四国・九州が最も高く23%でした。また、101~200羽も含めると約35%に上りました。関東地方では9年間の情報件数が合計271件で、101~200羽を含めても11件と中国・四国・九州の20件より少ないことがわかりました。情報件数が少ないものの他の地域でも201羽以上の群れの記録は少数です。したがって、カワラヒワは中国・四国・九州地方では大きな群れが多く記録される傾向があると言えそうです。

こうした地域的な違いの要因は良くわかっていません。関東地方は中国・四国・九州地方よりも気候が寒冷なため、刈取り後の稲の切り株からの萌芽の成長が遅く、刈取り後の結実が少ないのかもしれません。もしそうなら、刈り取り時期や気候の違いが、カワラヒワの冬期の個体数に影響している可能性があります。その他の温暖な地域ではどうなのでしょう。さまざま地域の多くの調査地で継続的に観察することで、日本におけるカワラヒワの越冬個体数の地域的な違いが明確になるものと思われます。

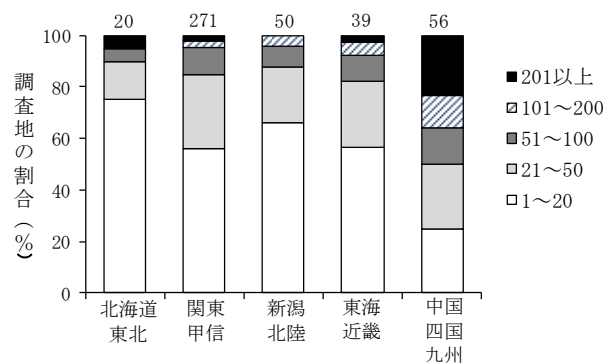


図5. 過去9年間におけるカワラヒワの個体数ランクの地域別割合

最後に

冬鳥ウォッチも 2015 年冬で 10 年が経過しました。上述のように少しずつ冬鳥たちの飛来状況を解明する基礎資料が得られています。ただ、この調査は、全国からの多くの情報が必要不可欠です。一地域だけの記録では、全体が見えてこない場合もあります。一人でも多くの皆様のご協力をお願いいたします。

ところで、イスカやハギマンコの情報が少ないのが気になります。ハギマンコはカシラダカやカワラヒワ、アトリなどより生息環境が岩場や山地の裸地を愛好する傾向があります。そのため、情報件数が少ないのは、日頃から定期的に観察するのが困難なためかもしれません。しかし、イスカは平野部のマツ林などにも出現します。2013 年冬にやや記録が多かったものの、1960 年代などのように大きな群れの情報はこの 10 年まったくありません。とすると、繁殖地での生息環境が悪化している可能性もあり心配です。2015 年冬は大きな群れこそ記録されませんが、マヒワの情報が全国から得られました。2012 年冬のように 2016 年冬はさらに増加するかもしれません。はたして、今冬はどのような冬になるのでしょうか。今から楽しみです。ぜひ、今後ともご協力のほどよろしくお願いいたします。

最後に、4 月 14 日から 16 日に熊本県で震度 7~6 の地震が頻発し、甚大な被害がでました。本調査にご協力いただいている会員の方もいらっしゃいます。さらに、この報告をまとめるために過去のデータを確認してましたら調査地に益城町が目にとまり、胸が締め付けられる思いを感じました。この場をお借りしてお見舞いと一日も早く以前の日常が戻ることをお祈り申し上げます。末尾ながら、2015 年冬の調査にご協力いただきました皆様のご芳名を記してお礼に替えさせていただきます。荒木廣治、石川喜春、石塚文信、井上賢三郎、上野尚博、上山義之、大塚啓子、大塚之稔、岡崎一也、笠原武、梶本恭子、金子はる子、狩野博美、川島賢治、衣川直美、木村有紀、小池重人、越川重治、小林俊子、小堀脩男、小松周一、齋藤映樹、鹿間信弘、嶋田哲郎、白石ひとみ、鈴木啓史、高橋邦年、多田英行、田中正晴、谷本洋子、鳥谷峯敏雄、中塩一夫、長嶋宏之、野中純、濱伸二郎、伴孝夫、平野敏明、福島英樹、藤波不二雄、古川紀美子、細井俊宏、本田敏夫、前迫大也、正木伸二郎、村田愛子、吉田敬喜、四ツ家孝司、渡部通の各氏。

(平野敏明)